

地域資源を生かした スポーツツーリズムの在り方について

—自転車イベントにおける健康安全管理と水分摂取についての検討—
A study of Sport Tourism in Regional Resources
—Health, Safety and Drink Management in a Cycling Event—

渡辺律子¹⁾・塩月亮子²⁾・丹野忠晋³⁾

Ritsuko WATANABE, Ryoko SHIOTSUKI, Tadanobu TANNO

要 旨

観光庁は観光立国日本の実現に向けて「スポーツ」と「ツーリズム」の融合を狙った「スポーツツーリズム戦略」(2011.6)を掲げ、スポーツという新たなモチベーションを持った人々の、国内観光旅行における需要の喚起と旅行消費の拡大を狙っている。今回はこれを受けて沖縄県が進めている「スポーツツーリズム戦略」事業の1つであるスポーツイベント、「ECO スピリットライド&ウォーク in 南城市」を事例として取り上げ、スポーツツーリズムの在り方について検証を行った。本研究ではスポーツイベント参加者を対象として測定及びアンケート調査を行い、3つの観点から分析を行った。参加者のモチベーションについての検証、次にスポーツイベントの在り方についての検証、そしてイベントに参加した際の満足度の特徴についてである。その結果、本スポーツイベント参加者のモチベーションについては、聖地・文化遺産等の観光資源への興味よりも、スポーツ自体の魅力で参加した者が多い事が分かった。今後は観光資源をどのようにアピールしていくかが課題であることが示唆された。スポーツイベントのコースについて、熱中症・脱水症予防の観点から、補水についての参加者への注意喚起とエイド(給水所)について検討をした結果、運動前後の体重測定による健康管理の必要性が示唆された。そして概ね参加者は今回のスポーツイベントに満足をしており、高い満足度を持っている参加者は、高額な費用を出している訳ではなく参加を妥当な金額と評価しており、イベント自体に魅力を感じていることが分かった。

1) 跡見学園女子大学 文学部准教授. mail: riwata@atomi.ac.jp

〒352-8501 埼玉県新座市中野 1-9-6 跡見学園女子大学

2) 跡見学園女子大学 マネジメント学部教授. mail: shiotsuki@atomi.ac.jp

3) 跡見学園女子大学 マネジメント学部准教授. mail: tanno@atomi.ac.jp

はじめに

我が国では2007年「観光立国推進基本法」が制定され観光庁が2008年に設立された。当初、観光庁は新しいツーリズム商品（ニューツーリズム）として、産業観光、エコツーリズム、グリーンツーリズム、ヘルスツーリズム、ロングステイ（長期滞在型観光）、文化観光を掲げた。ニューツーリズムとは従来の物見遊山的な観光旅行に対して、テーマ性が強く、体験型・交流型の要素を取り入れた新しい形態の旅行を指す（国土交通省 2010）。

スポーツイベントの目的はスポーツの振興（普及発展）、スポーツ自体を楽しむ（勝敗・記録更新）、健康の維持増進等が上げられるが、昨今はスポーツを観光資源の観点から捉えてその経済効果も期待されている。地元主体のスポーツイベントへの参加・観戦旅行に期待される効果の一つとして地域活性化があげられる。従来の観光旅行（文化遺産巡り、名勝巡り）のように一度見学（訪問）をすると、リピーターとして訪れる事が少ない「訪問型」ツーリズムに比べると、スポーツツーリズムはそのスポーツイベントが気に入れば、参加・観戦するためにツーリストは再訪問するので経済効果を持続することが可能である。またスポーツイベントには地域住民の協力が必要であるため、地域の連帯感や活性化も期待できる。しかしその一方で、経済効果やツーリストを呼び込むことによる自然環境破壊、住民の生活環境悪化等の弊害も指摘されている（山口 2005 p.44-46、原田ら 2009 p.117,123-125）。本論は沖縄県で開催された「ECO スピリットライド&ウォーク in 南城市」を事例に、地域資源を生かしたスポーツツーリズムの在り方について検討を行う。

第1及び2章では「スポーツツーリズム」について渡辺が述べる。第3章では参加者のモチベーションと地域資源について、事前アンケートに基づき塩月が分析を行う。第4章ではスポーツイベントにおける健康安全管理面と水分摂取について、測定結果及びアンケートから渡辺が検証を行う。第5章では丹野が事後アンケートの内容を検討する。特に筆者（丹野）が参加した自転車のスポーツツーリズムの体験を元にこのイベントに参加した際の満足度の特徴を調べる。第6章では本論のまとめと今後の課題について渡辺が著す。

1. スポーツツーリズムについて

観光庁が当初打ち出したニューツーリズム政策方針(2008)に「スポーツツーリズム」という言葉は見あたらなかった。観光立国推進本部（2010.1）が立ち上がり、そこで「スポーツ観光」が取り上げられ、同年5月「スポーツ・ツーリズム推進連絡会議」⁽¹⁾が誕生した。

「スポーツツーリズム」とは観光立国日本の実現に向けて「スポーツ」と「ツーリズム」の融合を狙ったものである。日本の持つ自然の多様性や環境を活用して、スポーツという新たなモチベーショ

ンを持った人々の国内観光旅行における需要の喚起と旅行消費の拡大を狙っている⁽²⁾。

各地で地元主催のスポーツイベントが行われており、千葉県では観光スポット「海ほたる」をコースに設定して「ちばアクアラインマラソン」(参加者 15000 人) が開催され、アクアラインを車両通行止めにして行われた(2012 年 10 月)。大会会場には千葉県全域の物産展が多数出店しており、参加者、応援者、観戦者、ボランティアスタッフ等による経済効果も大きく、TV 等のニュースでも取り上げられて県全体の宣伝にもなったようだ。スポーツやスポーツイベントへの参加・観戦を目的に観光行動をする人をスポーツツーリスト(山口 2005 p.107)と呼ぶ。他のツーリズムと異なった特徴として、スポーツツーリズムは観光の主体がスポーツツーリストであること、観光資源は体育館やスタジアムといった運動施設だけではなく、海や山等の自然環境であったり、オリンピックやワールドカップなど各種スポーツイベントやリーグ戦であったりする(原田 木村 2009 p.33-35) <下線筆者(渡辺)>。

そもそもスポーツは「観る」「する」「支える」という多様な参加形態を持ち、スポーツ資源という観点からみても、日本は十分なスポーツ資源を保有しているといえる。これをツーリズムとタイアップさせると「観るスポーツ」とは、各種スポーツワールドカップ、プロ野球、大相撲等国内外の観戦(ツアー)等である。「するスポーツ」としては、日本の地形や四季の変化を利用して楽しめるスキー、登山、トレッキング、ロードレース大会等がある。「支えるスポーツ」とはスポーツチームのキャンプや大会開催時の地域住民、大会のボランティアスタッフ、医療スタッフ等スポーツ実践をサポートする側のことであり、各種スポーツイベント開催に伴って必要とされる。すなわち「観光資源」と「スポーツ資源」の融合を図ることは、地域振興とスポーツ振興の両方にメリットがある。

朴らは、スポーツツーリズムによる地域活性化効果について、地域住民及びスポーツイベント参加者への質問紙調査を実施した結果以下のように述べている。

「地域住民はスポーツイベントで来訪する沖縄県外からの人に対し、スポーツ観光による効果(社会的効果、環境的効果、経済効果)や地域活性化につながることを期待している。また県外からのスポーツツーリストはイベントに対する満足度が高いほど、再訪の意思が高い」(朴ら 2012)

山口は地域活性化に貢献するスポーツイベントの成功要因としてリピーター比率、リピーターの満足度要因としてボランティアスタッフの対応がそれぞれ大きな割合を占めている(山口 2005 p.213-215)、と述べている。地域を活性化させるためには行政・各種民間業者(宿泊業・商工会・イベント会社等)・住民(ボランティア含む)が、スポーツイベントをまちづくりの重要なツールと捉え、持続的、戦略的に行う必要がある(朴ら 2012)。そしてそこには独自のスポーツツーリズム戦略が必要であると考える。

2. 沖縄におけるスポーツツーリズム戦略の概要

沖縄県は旅行客数の伸び悩みと観光消費単価の打開策としてスポーツツーリズムの推進をはかり、

新たな観光需要を作り出し旅行者の増加と県内産業等の活性化を期待している。

また沖縄県の観光資源としては温暖な気候、自然環境、歴史・伝統、マリンスポーツが挙げられるが、そこに新たにスポーツ資源という視点を加え、地域活性化を目指している。沖縄県は平成22年度に「沖縄県スポーツ・ツーリズム戦略推進事業」を立ち上げた。その目的は、スポーツをテーマに民間・自治体が取り組むスポーツイベント、スポーツを活用した旅行メニューのプロモーションやプロジェクトの実施等の企画提案を公募し、立ち上げを支援することで沖縄におけるスポーツツーリズムの定着化を図るというものである。この事業を通して沖縄ならではのスポーツが楽しめる観光地としての価値を作り出す。一方、スポーツを通して沖縄の魅力を伝えて国内外からの観光客を誘致することで、沖縄県の地域活性化を目指している。平成23年度「スポーツ・ツーリズム戦略推進モデル事業」として「ECOスピリットライド&ウォーク in 南城市」、「石垣アースライド」、「美ら島オキナワ Century Run 2012」など6つのプロジェクトが選定された。

3. 事例「ECOスピリットライド in 南城市」における イベント参加者のモチベーションと地域資源について

2012年3月25日(日)、沖縄県南城市において順位やタイムを気にせず、沖縄本島南部に点在する琉球の聖地や東海岸の風光明媚な景色に存分に触れ、家族でスポーツに親しみつつ健康増進を図り、スピリチュアルセレモニーで琉球の心を伝え、環境保全を訴えることを目的⁽³⁾とした「2012 ECOスピリットライド&ウォーク in 南城市」(主催：沖縄タイムス社、共催：南城市役所)が開催された。前年まで別々に行われていた「ECOスピリットライド in 南城市」と「東御廻り国際ジョイアスロン in 南城市」の2大会が統合され、自転車で聖地や遺跡を巡るライド部門は160km、80km、50km、30kmの4コース、徒歩で巡るウォーク部門は20km、14km、7kmの3コース(同距離コースが設定されたノルディックを入れると計6コース)が設定された。ライド部門はユインチホテル南城前がスタート&ゴール地点となり、532人が参加した。ウォーク部門はグスクロード公園がスタート地点、ユインチホテル南城がゴール地点で、739人が参加した。大会の参加者は計1271人となった⁽⁴⁾。我々が実施した事前アンケートは、それぞれのスタート地点に集合した双方の参加者に対して行われた。本章ではこれら2部門のアンケートを比較することにより、今回のイベントの特徴を分析していく。

事前アンケートに回答した人数はライド部門が196人、ウォーク部門が114人で、計310人であった。まず、参加者の年齢と性別を比較すると、ライド部門に参加したのは圧倒的に男性が多く、80%を超えているのに対し、ウォーク部門は女性が70%を超えているという逆の結果となった。これは、当然ながら女性にはウォーキングのほうが体力的・機材的にも敷居が低く参加しやすいからとみることができる⁽⁵⁾(図1・2)。

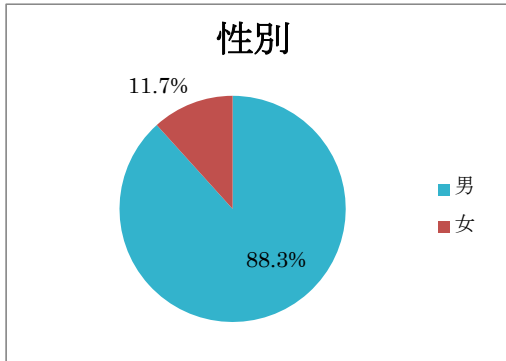


図1 ライド部門参加者の性別

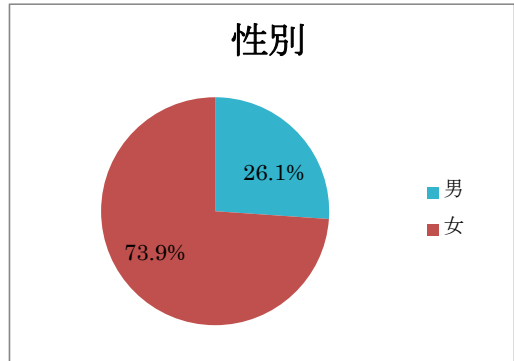


図2 ウォーク部門参加者の性別

次に、年代に関しては、ライド部門では30代が約31%と一番多く、ウォーク部門では40代が約28%と一番多い。ウォーク部門には中高年の参加者が多いことも、特徴の一つである（図3・4）。

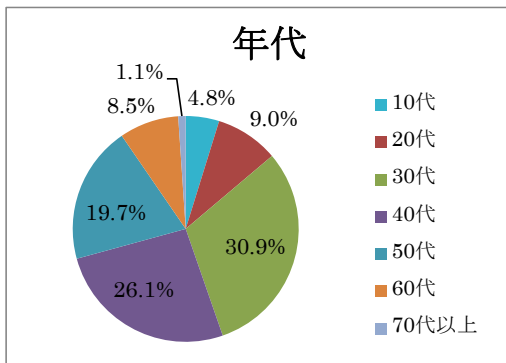


図3 ライド部門参加者の年代

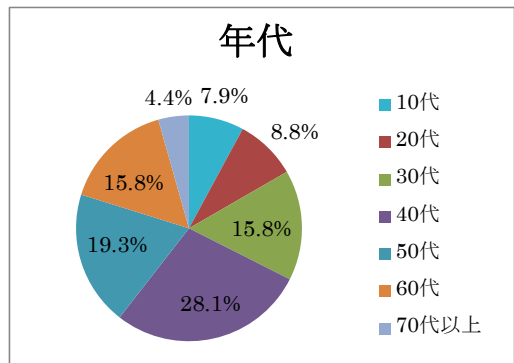


図4 ウォーク部門参加者の年代

また居住地に関しては、両部門とも沖縄県内が90%を超えており、県外の参加者が大変少ないことがわかる。ライド部門に関しては、全国に自転車愛好家がいることを考えれば、大会内容の魅力を増す、あるいは宣伝方法を見直すなどにより、県外からの参加者をさらに呼び込むことが可能と思われる（図5・6）。

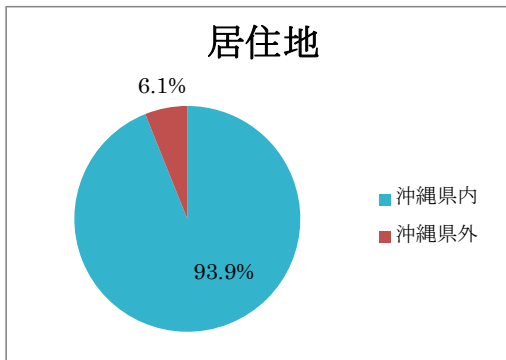


図5 ライド部門参加者の居住地

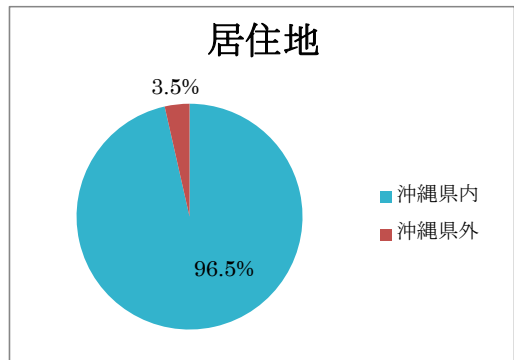


図6 ウォーク部門参加者の居住地

前回の調査⁽⁶⁾に引き続き、今回の事前アンケートで最も注目した項目はモチベーション、すなわち「参加理由」であった。ライド部門では「自転車で走ることに興味を持ったから」が約39%と最も多く、次いで「体力づくり」が約32%あった。主催者の事業目的のなかでも重要な要素である沖縄の聖地やスピリチュアリティ、世界遺産、歴史、文化など、地域資源に対する興味はそれぞれわずか2～3%台に過ぎなかった。これは、例えば主催者側がライド部門のスタート前に沖縄の神女（ノロ）による「スピリチュアルセレモニー」と称する安全祈願を行い（写真1）、琉球の心を伝えることを目指した⁽⁷⁾にも係わらず、それがあまり参加者には伝わらなかったかもしれないことを示す。



写真1 「スピリチュアルセレモニー」の様子（2012年3月25日塩月撮影）

エコロジーや自然に対するモチベーション関しても、約10%と少ないことが分かった。従って、ライド部門参加者は、主に自転車で走ることに興味があるから参加したのであり、沖縄の自然や歴史、文化など地域資源を重要なモチベーションとして捉えていないことがうかがえた（図7）。

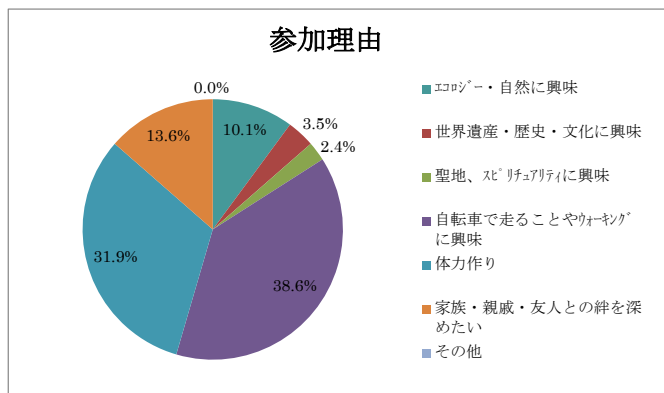


図7 ライド部門参加者の参加理由

一方、ウォーク部門でのモチベーションは、ウォーキングそのものに興味を持って参加した人は約9%と少なく、体力づくりが約33%と最も多く、次に世界遺産や歴史・文化への興味からが約18%、エコロジーや自然に興味をもったからが約15%、聖地やスピリチュアリティに興味があったからと答えた人は約8%強いた。エコロジーや自然、世界遺産や歴史文化、聖地などをあわせた割合は42%で、これはちょうどウォーキングに興味があるからと答えた人と体力づくりと答えた人の総和42%と同じだった。従って、ライド部門参加者よりウォーク部門参加者のほうが、沖縄の自然や歴史文化、聖地などの地域資源により興味を持って参加したといえる（図8）。

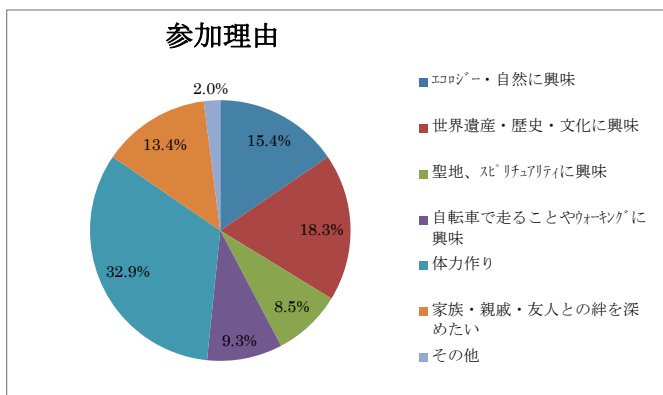


図8 ウォーク部門参加者の参加理由

今回のような聖地を巡るスポーツイベントの参加歴に関しては、両部門とも「いいえ」と答えた人が70~80%と多く、今回初めて世界遺産や聖地を自転車や徒歩で巡る体験をした人が多かったと考えられる（図9・10）。これは、今後のやり方によってはリピーターを増やす可能性があることを示している。

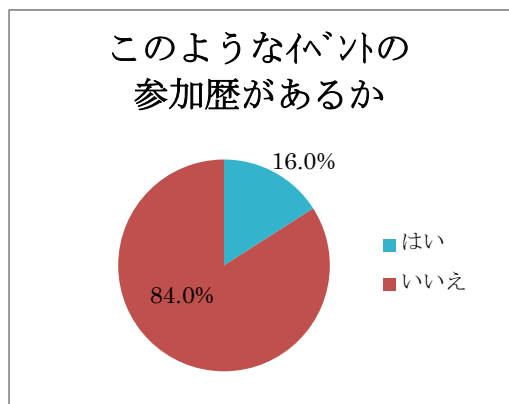


図9 ライド部門参加者の参加歴

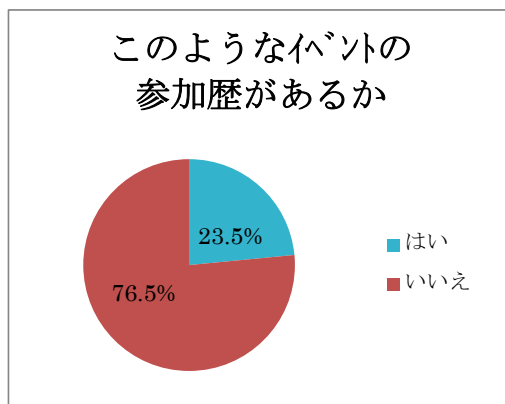


図10 ウォーク部門参加者の参加歴

両部門の参加者に他の場所での世界遺産や聖地巡りの経験の有無を聞いたところ、ライド部門では

「ある」と答えた人が約40%だったのに対し、ウォーク部門では50%が経験者であった。ウォーク部門のほうが多いということは、今回の大会への参加理由で世界遺産や聖地に興味があると答えた人がウォーク部門に多かったことと関連すると考えられる(図11・12)。

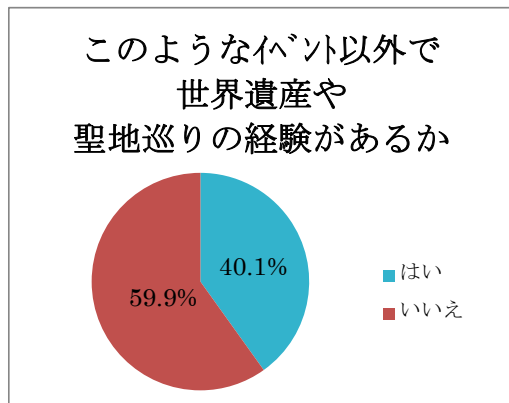


図11 ライド部門での世界遺産や聖地巡りの経験

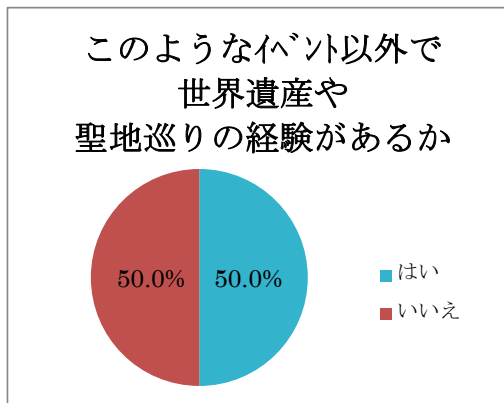


図12 ウォーク部門での世界遺産や聖地巡りの経験

さらに、今回のイベント以外で世界遺産や聖地巡りをしたことがあると答えた人に関して、その理由を聞いたところ、ライド部門では約60%の人が観光を目的とし、約18%強の人が伝統的習慣に興味があったからと答えた。ウォーク部門の参加者も、約61%の人がライド部門と同じく観光を第一の目的にしているものの、約21%の人が伝統的習慣に興味があったからと回答し、その数字はライド部門よりも若干高くなっている(図13・14)。

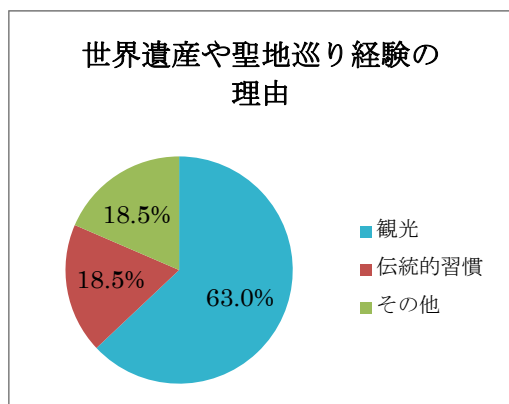


図13 ライド部門参加者で、これまで世界遺産や聖地を巡った理由

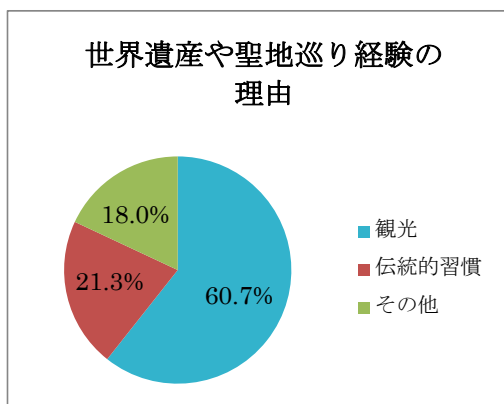


図14 ウォーク部門参加者で、これまで世界遺産や聖地を巡った理由

最後に両部門の参加者に「今後どのような世界遺産や聖地巡りをしてみたいか」について聞いたところ、国内では屋久島や長崎の軍艦島、熊野、富士山、海外ではマチュピチュやフランスの修道院、

ピラミッド、エルサレム、グランドキャニオン、イエローストーン等があがった。また、本大会に参加申込して感じたことについても自由回答で聞いたところ、「世界遺産や聖地の保存・維持は大変だ」「パワーをもらえる」「聖地を巡りながら勉強も体力づくりもできて幸せ」「知らなかった遺産を間近にみられてよい」「癒される穴場をさがしたい」「沖縄にも素晴らしい遺産があり、もっと勉強しなければならないと思う」「ウタキ（御嶽）に行きたい」「聖地の大切さを感じる」などの意見・感想があった。

以上をまとめると、ライド部門とウォーク部門の共通点は、沖縄県在住の参加者が 90%を超えており、県外の参加者が大変少ないことである。今後、県外からの参加者をさらに呼び込むことができれば、沖縄の文化・歴史等に対する理解の深化や経済効果の促進などを今以上にもたらすことになるだろう。

一方、両部門の大きな相違点は、そのモチベーションにみられる。ライド部門では、主に自転車で走ることに興味があるから参加しており、沖縄の自然や歴史、文化的なものをあまり重要な参加理由としていない。だが、ウォーク部門では、エコロジーや自然、世界遺産や歴史文化、聖地などの地域資源にも興味を持ち参加している。

事前調査の自由記述をみると、世界遺産や聖地に興味がある人もみられる。今回の結果を踏まえ、今後はライド部門ではより女性を集める努力を、ウォーク部門でもライド部門と同様に県外の人を呼ぶ努力をし、加えて大会前後を通じて沖縄の自然や歴史、文化、世界遺産、聖地といった地域資源にこれまで以上に興味を持つように仕向けることが重要になるだろう。そして、両部門とも参加者、およびリピーターのさらなる増加を目指すことが望まれる。

4. スポーツイベントの健康安全管理についての検証

本章では健康安全管理について検証を行う。まず、「ECO スピリットライド&ウォーク in 南城市」のコース内容・参加費は表 1-1 と表 1-2 の通りである。

表 1-1 コース内容 <ライド(自転車)部門>

コース名	距離	参加費	定員	完走者／参加者数
ライド A (センチュリー)	160 km	8000 円 中学生以下 5000 円	250 人	197／230 人
ライド B (南部一周)	80km	同上	250 人	190／214 人
ライド C (南城市ふれあい)	50km	7000 円 中学生以下 4000 円	200 人	43／50 人
ライド D (斎場御嶽・久高島めぐり)	30km	同上	30 人	28／30 人

表1-2 コース内容 <ウォーク部門>

コース名	距離	参加費	定員	完歩者/参加者数
ウォーク A(ファミリー)	7km	2500 円 中学生以下 1500 円	300 人	285/295 人
ウォーク B(ミドル)	14km	同上	300 人	184/199 人
ウォーク C(チャレンジ)	20km	同上	100 人	131/134 人
ウォーク D(ノルディックファミリー)	7km	同上	100 人	31/31 人
ウォーク E(ノルディックミドル)	14km	同上	100 人	32/32 人

1) 測定及びアンケート調査

本調査は設定されたコースが参加者個人に適切なものであったかを検証するために行った。当日の気象状況について天候は晴れ、気温、13~19℃、早朝から風が強く午後からは突風が吹いた。調査内容は以下の通りである。

- ・測定項目 運動前後の体重（脱水率を算出*） / 運動前後の体温
- ・アンケート 運動所要時間/補水量/個人の安全・健康状態に関するアンケート

測定は屋外にテントを設置して午前 5:30 から体温・体重の測定を行った。しかし当日は朝から強風のため体感温度が低く感じられたためか、測定協力者が予想以上に集まらなかった。突風でテントが飛ばされそうになり、午後には体重測定等を中止せざるを得ない状態となった。データの内訳は表 2 の通りである。

表 2 データ人数 35 人の内訳

160km コース	12 人
80km コース	7 人
50km コース	5 人
30km コース	4 人
ウォークコース	2 人
コース不明	5 人

*脱水率の算出方法

運動後体重 - 運動前体重…(1)

(1) ÷ 運動前体重×100 …(2)

(2) > 2% 要水分補給

(日本体育協会、全米スポーツ医学会)

2) 結果および考察

「熱中症の症状（頭痛、めまい、吐き気、足が痙る等）の有無」

(図 15) について、36%が何らかの症状があったと回答をしている。熱中症など暑さへの耐性は個人差が大きい、体力の低い人、肥満の人、持久的能力の低い人は暑さに弱い傾向にある。かつて熱中症になったことのある人も注意が必要である。熱中症予防対策として水分補給は絶対に必要であり、

喉の渇きを感じる前からの水分補給が大切であり、渇きを感じた時では遅いという見解が一般的である。「喉の渇きを感じた時にすぐに水分補給を行ったかの有無」(図 16) について 13%が「いいえ」であった。喉が渇いていると感じたにもかかわらず「水分補給を行わなかった」と回答していることについては、本人の水分補給に対する認識の甘さが考えられる。水分不足は熱中症の要因にもなるが、運動パフォーマンス(運動技術・判断力・持久力)の低下も引き起こすので、それらを考えれば自転車を安全な場所に止めて、こまめに水分補給をするという姿勢でイベントに参加をすべきだと考える。しかし、自転車ロードレース(競技)では自転車に乗りながら補水するという事が一般的に行われており、それに見合った運転能力を持った者であれば、乗りながらの補水も認められるのであろうが、本大会の趣旨から考えると主催者側は安全管理上の視点から、水分補給の指示の徹底、例えば「エイドステーションには必ず寄る」等があっても良いと感じた。筆者(渡辺)が参加した 30km コースでは、給水エイドが下り坂のゆるくカーブした道路に面する学校敷地内にあったが、参加者は下り坂の勢いでそのまま坂を下ってしまいエイドを見過ごしてしまいそうな場所にあると感じた。熱中症予防対策として体が脱水症状を起こさないようにすることは大切であり、日本体育協会や全米スポーツ学会も脱水率が 2%を超えない範囲での運動を推奨していることに留意すべきである。

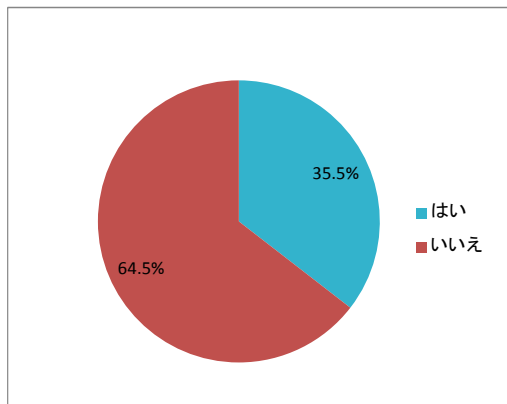


図 15 熱中症状の有無について

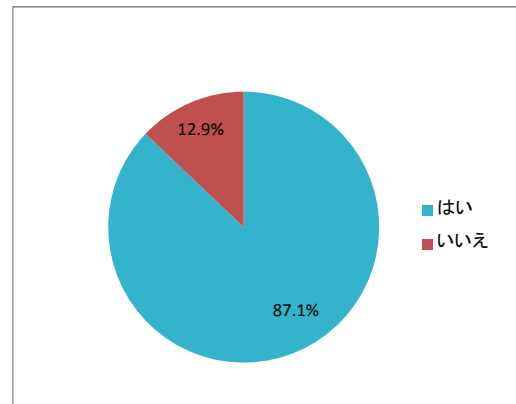


図 16 「喉の渇き」を感じた時にすぐに水分補給をしたか

次に運動前後に測定した体重から脱水率を算出した。脱水率が 2%を上回った者は 28%であった。脱水率 2%以上の者のコース別内訳比率をみると、160km コースでは 68%(7 名)、80km コースでは 14%(1 名)であった。50km 及び 30km コースには脱水率が 2%以上の者はいなかった。参考までにウォーキング部門では脱水率 2%以上は 2 名であった。160km コース参加者についてさらに詳しく分析を進めると、脱水率が 2%以上の 7 名のうち 4 名と脱水率が 1.96%であった 1 名は「熱中症の症状(頭痛、めまい、吐き気、足が痙る等)の有無」で「有り」と答えていた。アンケートにはおよその補水量を記入してもらったが、脱水率 2%以上の者の補水量は 1000~2000ml であった。補水量 2300

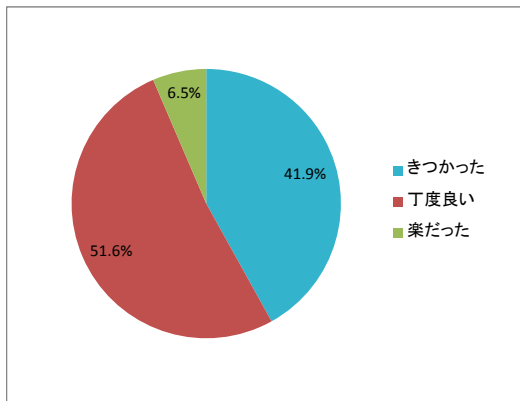


図 17 コースについて

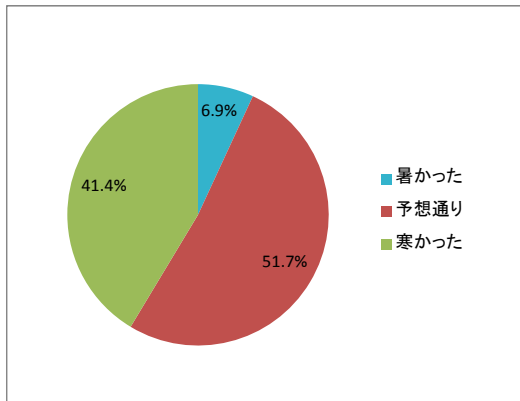


図 18 気候条件について

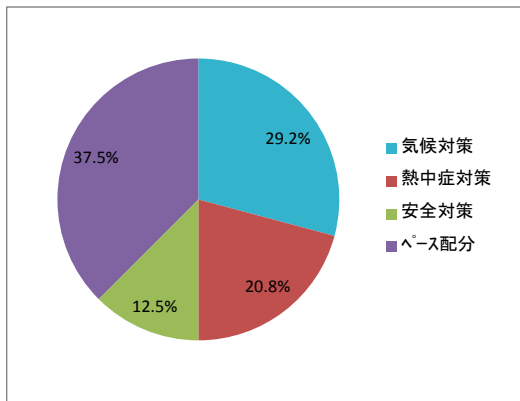


図 19 不十分だったと思う対策

～2500ml の者については脱水率 2%以上、及び熱中症症状を訴えた者はいなかった。この結果より熱中症予防には水分摂取は重要であり、今回のスポーツイベントで 160km を走行した場合、2500ml 程度の補水が必要であった事が推測された。これは非常に興味深いデータである。160km コース参加者は日頃からトレーニングを積み、自転車走行に自信がある者と考えられ、熱中症や脱水症状に関する知識は十分にあると推測されるが、それでも測定の結果から、脱水症状を起していた可能性があることが分かった。

「コースについて」(図 17) 聞いたところ 42% が「きつかった」と感じている。とくに 160km コース参加者に「きつかった」の回答が多かった。スタートが山の上なので、帰路の最後に登り坂(ニライカナナイ橋)がある事を参加は理解していた。160km コースの参加者は日頃、自転車によるトレーニングを行っていると推測され、コースに見合ったペース配分も考えて走行したと思われるが、それでも「きつかった」と感じたていた。

「気象条件について」(図 18) は 40%が予想より「寒かった」と回答した。当日は朝から強風が吹いており地元の人も「春の嵐だ」と驚いていた。マラソンや自転車等の野外スポーツでは気象条件はパフォーマンスに大きな影響を与える。沖縄で開催された同様の自転車イベントでは大会ホームページに気象状況について確認できるリンクが貼ってあり、県外からの参加者に対して親切であると筆者(渡辺)は感じた。大会参加後「準備不十分」を感じたと回答した 19 人うち「ペー

ス配分」が 38%、「気候対策不足(寒さ・暑さ)」が 29%、「熱中症対策不足」が 20%であった(図 19)。その他「参加した感想・改善点」の自由記述アンケートでは「エイドはもっと多い方がよい」という意見が複数あった。コースに関しては「起伏のあるコースはそれがわかるように表示をしてほ

しい、「交通規制のない車道が危ない」「コース案内が少ない」「コースを間違えそうになった」等の意見があった。

スポーツイベントを継続させる要因として参加者のリピーター率は重要であり、山口は継続参加のマイナス要因として「スタッフの横柄な態度」「不便な時間スケジュール」「不便で少ないトイレ」「事前事後の不十分な広報」「観光に関する情報不足」、プラス要因として「会場への良好なアクセス」「安全・快適」「個人的指導とフィードバック」「ボランティアの暖かい対応」を挙げている(山口 2005 p.213 表 2)。「自由記述アンケート」をこの観点から検討をすると、継続参加のマイナス要因が複数ある事が分かった。以上のことから、主催者側は参加者側に立った健康安全管理についての配慮が足りなかった点があった事が推測される。その他、県外参加者の意見だと思われるが「沖縄県の気候(気象)状況のアナウンス」や「服装の注意点」を知りたかったとの記載もあった。今回は県外参加者が1割程度であったが、本スポーツイベントを継続させるためには今後は県外参加者の増加を目指すことも必要であり、少数意見も充分考慮する必要があると考える。健康面については「終了後のストレッチ(クーリングダウン)をすればよかった」等の反省があった。

なお測定については「運動前後の体重の増減はほとんどが発汗によるものである。運動前の体重から運動後の体重の体重を引いて「脱水率」を計算する(全米スポーツ学会)」という、日本体育協会や全米スポーツ学会が推奨している一般的理論に基づいて行った。今回のような自転車スポーツ(楽しみながら距離を走る)の場合、走行中の補水だけではなくエイドでの補食(今回は途中で昼食)も摂るため、体重の増減は水分量の増減以外の要因もある。それでも160kmコース参加者で脱水率が2%以上の7名のうち4名と脱水率1.96%であった1名については熱中症状が「有った」と答えている。すなわち運動前後の体重測定を行う事は脱水症状の目安としてある程度有効である事が今回の調査で示唆された。

5. 事例からみたスポーツツーリズムの満足度

ここでは事後アンケートの内容を検討する。特に執筆者(丹野)が参加した自転車のスポーツツーリズムの体験を元にこのイベントに参加した際の満足度の特徴を調べる。高い満足度を持っている参加者は、高額な費用を出している訳ではなく参加を妥当な金額と評価しておりごく普通に参加して、イベント自体に魅力を感じていることが分かった。

5-1 事後アンケート結果

ここではエコスピリットライド2012年の事後アンケートの結果を分析する。さらに塩月他(2012)が行った2011年に開催された同イベントとのアンケート結果との比較を試みる。前回のアンケート

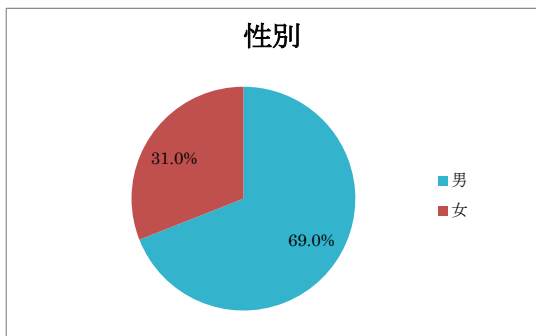


図 20 性別

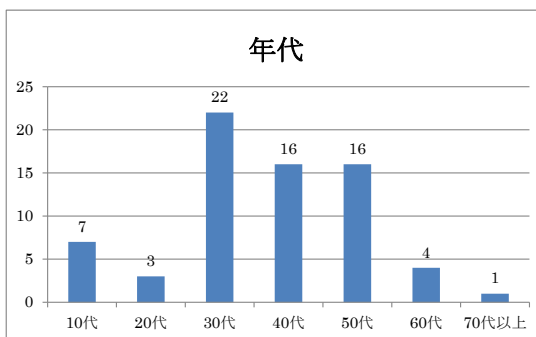


図 21 年代標本数

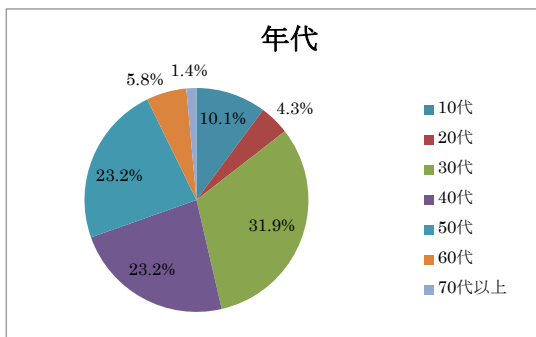


図 22 年代割合

では東御廻りコース 30km と B コース 80km の 2 種類の集計を行っている。今回のアンケートは一括してなされているので比較には注意をする。また、実際に A コース 160km を走った際の筆者(丹野)の実感を踏まえてこのアンケートを検討する。

前年に開かれた 2011 年の本大会の全容は ECO スピリットライド大会実行委員会(2011)が参考になる。2012 年の本大会は前年とほぼ同じコース設定である。また、沖縄タイムス社(2012)は本アンケートと同様のアンケートを実施している。それは本アンケートよりも包括的で実施対象者数は本アンケートよりも多い。

全被験者数は 75 である。まずは図 20 より男女別の構成比を見ると男性が 69% を占めている。以前の 2011 年のアンケートでは男性が約 6 割から 8 割であった。被験者数が多くなった分、参加した際の実感により近いものになったと考えられる。

次に図 21 の参加者の年代であるが 30 代から 50 代が最頻値であり、平均を取ってもこの年代に当てはまるであろう。前回のアンケートの B コースの 80km は本アンケートの距離よりも短い距離であったが、同じように 30 代から 40 代の参加が多かった。長い距離だと年齢層が上になるのは直感に合っている。

距離が長いと高性能な自転車でないといと完走は難しい。そのために 20 代以下の参加者が極端に少ないと推察できる。また若年層で自転車に興味のあり競技自転車を購入できる人々は体力が十分にあるので純粋にタイムを争う競技の方に関心を持つのである。

図 22 の年代の割合について参考まで提示したが、30 代が約 3 割を占めている。20 代に比べて 10 代が少し多いのは、親子で参加している子供の高級自転車取得に理解のある親が一定数いることの反映かも知れない。図 23 の居住地を見ると沖縄県内が圧倒的多数である。これは前回のアンケートでも同様であった。県外からの参加者を増やすことがこのイベントの活性化の 1 つとして挙げられよう。

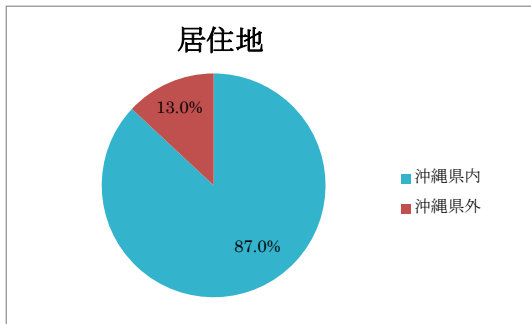


図 23 居住地

しかし、筆者が参加した他のイベントであるツール・ド・国東(2011年)の経験からこのようなイベントは近隣の市町村や近くの中核都市の人々が主な参加者を構成している。その割合は、今回の調査結果の13%と似たり寄ったりと推察できる。従って、限られた予算や人員からイベント活性化への現実的な対応は、県内からの参加者の満足度をどうやって高めるかであろう。

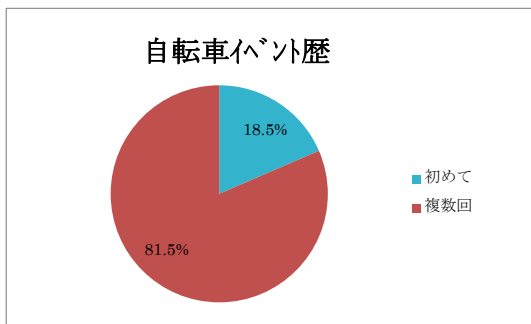


図 24 自転車イベント歴

図 24 には自転車イベントの経験の有無がまとめられている。約 8 割が経験者である。前回のアンケートの B コースの結果では約 9 割が経験者であった。これもほぼ同じ傾向であると言える。今回の事後アンケートは 160km の最長の自転車コースからウォークまで含まれたサンプルなので、前回から割合が落ちるのは不思議ではない。図 25 や図 26 には参加理由があるが 6

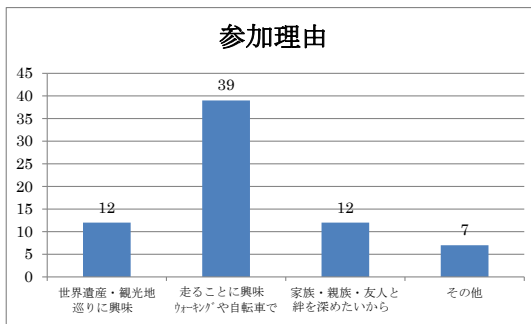


図 25 参加理由

割弱が「ウォーキングや自転車で走ることに興味」となっている。これは前回のアンケートと同様の結果だと言えるだろう。聖地を特徴としたイベントではあるがそれを主目的とした参加者が多数を占めているわけではない。もっとも、運動が不得意で世界遺産や聖地に興味のある人は元から参加しないだろう。それを考えると観光に興味がある人に良い汗をかいて貰う機会を与えることや或いは運動が主眼であるがこれをきっかけに沖縄の豊富な観光での楽しみを目覚めさせることにこの種のタイプのスポーツイベントの大きな効用があるのかもしれない。

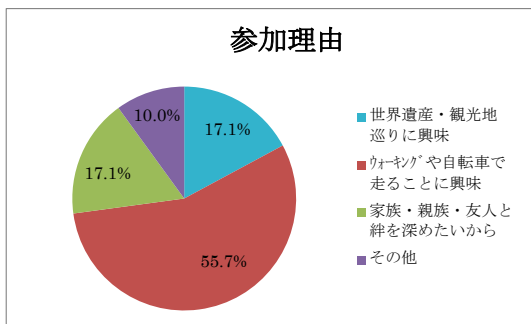


図 26 参加理由の割合

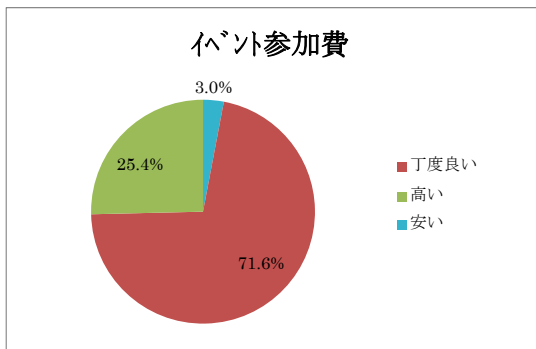


図 27 イベント参加費

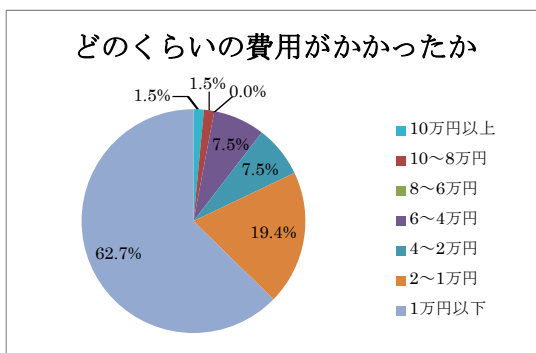


図 28 どのくらい費用がかかったか

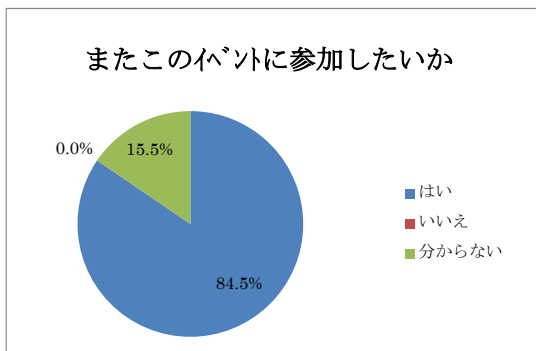


図 29 次回への参加意欲

図 27 にはイベント参加費について主観的な評価が記されている。約 7 割が丁度良いと答えている。高いと答えているのが四分の一である。これは前回のアンケートの短い距離と長い距離のアンケート結果のほぼ中間に位置していると考えられる。前回の 80km コースでは参加費が高いという回答の比率が高かった。このことからこの調査項目についても前回と何ら変わっていないと結論づけられる。センチュリーランからウォーキングにかけての横断的なイベント参加費の個人的な負担の感覚の全体的な傾向は妥当なものだと言えるだろう。

図 28 にはどのくらい費用がかかったか客観的な数字が記されている。半分以上の参加者が 1 万円以下と答えている。次が 2 万円から 1 万円まで 2 割を占めている。つまり殆どの参加者はほぼ参加費くらいしか負担していないことが分かる。このことはコースの上にある南城市や那覇市から参加している人々が多く見られることから分かる。つまり、このイベントは地元の人々を中心に参加しており、余り費用をかけていないことが分かる。けれども、費用を 4 万円以上かけている人も約一割いる。このような県庁所在地から通勤圏内にあるイベントは、居住地を中心とした参加者を中心に行われていると考えられる。

図 29 で次回への参加意欲を見ると 8 割強がまた参加したいと答えている。これは前回の東御廻り

りコースの結果を上回っている。サンプル数が少ないのではっきりしたことは言えないが自由記述のアンケート結果と比較すると大成功であったことが分かる。しかし、不満を持つ人が快くアンケートに答えるとは限らないのでこの判断には限定条件が付くことを忘れてはならない。以上あげたアンケート結果は沖縄タイムス社 (2012)で実施されたアンケートと同様の傾向を示している。しかし、この次回への参加意欲は本アンケートが唯一のものである。今度同様のアンケートを実施する場合に沖縄タイムス社 (2012)との差別化が必要となってくるが、本項目はそのカギとなる質問になるであろう。

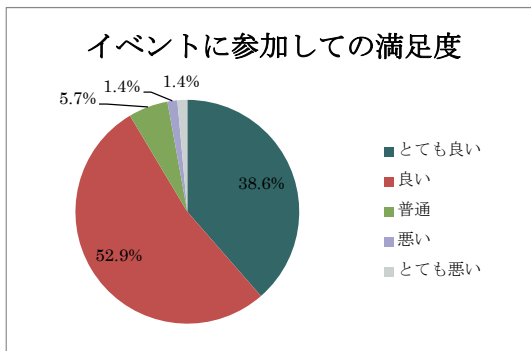


図 30 イベントに参加しての満足度

図 30 にはイベントに参加しての満足度が記載されている。とても良いが 4 割近くを示しており、良いを含めると 9 割の参加者がこのイベントを高く評価している。普通を加えると 97% の満足であり大方が満足していると言えよう。一方でとても悪いが 1 名(1.4%)いる。その自由記述を見るとコースの案内が悪く希望したコースを走れなかったとある。自転車イベント歴は 3 年で高齢の参加者であるので初心者に近い人が参加すること

をも考えて主催者側はコース案内を行った方が良いだろう。

表 3 に事後アンケート自由記述が記されてある。自分の体力不足や体調に関する記述の他には運営面での不備についても意見が見られた。また、「体重測定に興味有り」という回答は本研究の柱である水分量の測定に意義があることを示している。

5-2 アンケート結果の考察

本アンケートはサンプル数が少ないものの前回と同様の結論をほぼ得られたことと及び沖縄タイムス社 (2012) のより詳しいアンケートの結果と比較しても似た帰結を得ている。このことは本アンケートの信憑性を保証するものである。しかし、そのオリジナリティを發揮する必要がある。この点に関しては満足度を詳しく見てみよう。イベントに参加して「大変良い」と答えた参加者が 27 名いる。そして、1 名を除いてまた参加したいに「はい」と答えている。その 1 名は県外の参加者であったので地元を中心とする参加者は、積極的のこのイベントに関わりたいと考えていることが分かる。彼らのイベント参加費に関する設問には 25 名が「丁度良い」と答えている。残り 2 名が「高い」を回答している。全体では 71.6% の参加者が参加費が丁度良いと考えているので、満足度が大変高い参加者ほど参加費が妥当だと見なしている。また、イベントにかかった費用が「1 万円以下」と答えた参加者は 17 名であり、全体の内の 62.9% を占めている。全体の参加者の費用の 1 万円以下が 62.7% であることを考えると費用面では標準的な支出を行っており、参加費も妥当と判断しているので高い満足度の参加者は、金銭面での評価よりもコースやイベント自体に価値を見出していることが分かった。

高い満足度を持っている参加者は高額な費用を出している訳ではなくごく普通に参加して、イベント自体に魅力を感じていることから、今後の満足度を高めるためには参加費の負担を現状に抑えてその範囲でイベント自体の魅力を高めるべきであろう。またコース案内やエイドの不足を指摘する参加者がいるのでそのような人々へのサポートもよりイベントの価値を高める方法だと考えられる。

表3 事後アンケート自由記述

	参加しての感想や良かったことや改善点。聖地巡りの活性化について
1	寒いのもう少し暖かくなってから
2	エイトステーションがもっと多い方が良い
3	駐車場が遠い
4	体重測定に興味有り。聖地のポイントなどに立ち寄ったらスタンプを押すなど企画があったら楽しいと思う
5	Dコースの行きで人がいなくて迷った
6	エイトステーションで沖縄のお菓子を多く
7	案内人がいなくて一人での参加に対して寂しかった
8	また参加したいです
9	仲間で一緒に走って楽しかった。80kmはもう一つエイトステーションほしいです。
10	エイトステーションはもう少し増やした方がいいと思います
11	達成感でいっぱいです
12	フードリンクにしてほしい。Tシャツも色が選べたらベスト
13	運営おつかれさまでした
14	Good
15	参加社へのユナイテッドホテル利用の際の割引等
16	もっと体力をつけないとダメ。ライドの前にはしっかりと休憩したい。
17	楽しく参加できました。ありがとうございます。
18	景色のいいイベント海上でビールが飲めたのが最高でした（ちょっと風が強いが）
19	聖地を巡れて良かった。コースを間違えてあやうくフェリーに乗り遅れるところだった。間違いやすい所へは人が立って案内して頂けると尚良いと思います。
20	自転車では走るのが大変なので、世界遺産のパンフレットとかポスターがあるといい
21	世界遺産巡りのツアーも考えて下さい
22	コース案内の標識が少なく非常に困った。希望したコースを走ることが出来ず残念
23	ウォーキングコースをよりよく安全になるように改良してほしいです。

6. おわりに

本研究は沖縄の温暖な気候、自然環境、歴史・伝統等の観光資源を利用した参加型スポーツイベント「ECO スピリットライド&ウォーク in 南城市」を事例として取り上げ、スポーツツーリズムの観点から検証を行った。会場となったホテルや物産店、飲食店の協力による地域のつながり、協力体制があったと筆者（渡辺）は感じた。今回の調査で明らかになったことは、参加者の8割がこのイベントに「再度参加したいと思う」と答えている事から概ね参加者は今回のスポーツイベントに満足をしており、高い満足度を持っている参加者は、高額な費用を出している訳ではなく参加を妥当な金額と評価しており、イベント自体に魅力を感じていることが分かった。

また参加者の8割強が沖縄県内者であることから、今後は県外者をいかに誘致するかという課題が明らかになった。大会前後を通じて沖縄の自然や歴史、文化、世界遺産、聖地といった地域資源に興味を持つよう仕向けることで、両部門とも参加者、およびリピーターのさらなる増加を目指すことが可能となろう。健康安全管理面、特に熱中症予防の観点から補水の重要性が示唆された。

運動前後の体重測定を行うことで脱水率が2%以上の者に対しては水分補給を促すことが望ましく、参加者の健康管理に役立つことが分かった。

<謝辞>

「2012 ECO スピリットライド&ウォーク in 南城市」での調査を許可し、様々な面でご協力くださった大会実行委員長の高謝景春氏（南城市長）、副委員長の比嘉弘氏（沖縄タイムス社広告局長）、事務局次長の宮城寛志氏（南城市市民福祉部健康課課長）ならびに具志堅毅氏（沖縄タイムス社広告局企画推進部長）、事務局員の比嘉直氏（南城市観光・文化振興課主任主事）ならびに金城健太氏（沖縄タイムス社編集局整理部主任）、実際の交渉・連絡をしてくださった宮城俊大氏（沖縄タイムス社広告局）、測定に関して大変お世話になった濱田志保氏（株式会社アイテックソリューション ウェルネス事業部）、井勝 毅氏（ウェルネスリゾート沖縄休暇センター ユインチホテル南城）には、この場を借りて心からの感謝を表します。また、パソナの都築悦子氏にはデータ入力と図表作成に助力を賜りました。記して感謝します。その他の大会事務局の皆様、ユインチホテル南城の皆様、アンケートに答えてくださった参加者の皆様にも、執筆者一同、深謝申し上げます。

なお、本調査をまとめるにあたっては跡見学園女子大学特別研究助成費を使用致しました。あわせて御礼申し上げます。

注

- (1) 「スポーツツーリズム」の表記については「スポーツツーリズム」と「スポーツ・ツーリズム」が存在する。固有名詞として使われている場合はそれに倣って表記（「スポーツ・ツーリズム推進連絡会」等など）、他は「スポーツツーリズム」と表記した。

- (2) 本論文では観光庁の定義を採用したが、二宮(2009)の論文では「スポーツツーリズム」の諸相が詳細に区分されて述べられている。
- (3) 2012年 p.5 (『平成23年度 スポーツツーリズム戦略推事業(モデル事業実施業務) 2012 ECOスピリットライド&ウォーク実施報告書』)。
- (4) 2012年 p.60 (『平成23年度 スポーツツーリズム戦略推事業(モデル事業実施業務) 2012 ECOスピリットライド&ウォーク実施報告書』)。
- (5) 筆者(塩月)自身も、今回は敷居の低いウォーク部門 20 kmコースに家族と参加してみた。こちらはライド部門と比べて家族での参加が多く、その点は大会目的に合っていた。
- (6) 「2011 ECOスピリットライド in 南城市」の事前アンケート調査においても、サイクリング、なかでも特に長距離コースの参加者に関しては、沖縄の聖地巡りよりも自転車そのものに興味がある人が多いことが明らかとなった。その調査では、今後は他のサイクリングイベントと差別化するためにも、沖縄らしい魅力ある観光資源のアピールを今以上に行っていくことが欠かせないと論じた(塩月、丹野、渡辺 2012年 p.47 参照)。
- (7) 2012年 p.5,p.32 (『平成23年度 スポーツツーリズム戦略推事業(モデル事業実施業務) 2012 ECOスピリットライド&ウォーク実施報告書』)。昨今のパワースポットブームやNHKドラマ「テンペスト」(原作:池上永一)の放映などにより、南城市にある斎場御嶽には年間35万人もの観光客が訪れる(2012年 p.6)が、そのような貴重な地域資源が本イベントの参加者の関心をそれほどひかない理由を今後考察していく必要があるだろう。

参考文献

- ECOスピリットライド大会実行委員会(2011)『ECOスピリットライド in 南城市 実績報告書』沖縄タイムス社。
- 岡本純也(2010)「観光資源」としてのスポーツ『一橋大学スポーツ研究』第29巻, pp. 32-36.
- 岡本純也(2011)「地域活性化策としてのスポーツ・ツーリズムの可能性」『一橋大学スポーツ研究』第30巻, pp. 61-66.
- 沖縄県(2011)「スポーツ・ツーリズム推進事業(戦略構築等業務)」報告書(2011.3).
<http://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/sports/shinko/documents/report00.pdf>
(アクセス日 2013/01/07)
- 沖縄タイムス社(2012)『平成23年度スポーツ・ツーリズム戦略推進事業(モデル事業実施業務) 2012 ECO SPIRIT RIDE & WALK in NANJO 実施報告書』平成24年3月30日。
- 国土交通省観光庁観光産業課(2010)「ニューツーリズム旅行商品 創出・流通促進ポイント集(平成21年度版)」<http://www.mlit.go.jp/common/000114212.pdf> (アクセス日2013/01/07)
- 佐藤晋太郎、原田宗彦、大西孝之(2009)「スポーツツーリストとスポーツエクスカージョニストの再訪 意図: ニセコの来訪者の知覚価値に着目して」『スポーツマネジメント研究』第1巻第1号, pp. 19-31.
- 塩月亮子、丹野忠晋、渡辺律子(2012)「沖縄の世界遺産と観光一聖地を用いたスポーツイベントの事例から」『跡見学園女子大学観光マネジメント学科紀要』第2号, pp. 35-49.
- 社会経済生産性本部(2007)「レジャー白書 特別レポートー余暇需要の変化と「ニューツーリズム」ー」『レジャー白書2007』文栄社, pp. 85-121.

地域資源を生かしたスポーツツーリズムの在り方について

- スポーツ・ツーリズム推進連絡会議(2011)「スポーツツーリズム推進基本方針～スポーツで旅を楽しむ国・ニッポン～」<http://sporttourism.or.jp/pdf/sporttourismpromotingbasicpolicy.pdf> (アクセス日2012/12/10)
- 二宮浩彰(2009)「日本におけるスポーツ・ツーリズムの諸相：スポーツ・ツーリズム動的モデルの構築」『同志社スポーツ健康科学』創刊号, pp. 9-18.
- 朴永晔、秋吉遼子、稲葉慎太郎、山口志郎、山口泰雄(2012)「スポーツツーリズムによる地域活性化のアクションリサーチー沖縄県名護市のスポーツ観光のまちづくりをめざしてー」『SSFスポーツ政策研究』第1巻1号, pp. 150-156.
- 原田宗彦(2011)「スポーツイベントによる地域活性化：アウトドアスポーツとスポーツツーリズムの観点から」『JOYO ARC』2011年2月号, pp. 6-11.
- 原田宗彦、木村和彦編著(2009)『スポーツ・ヘルスツーリズム Sport & Health Tourism』大修館書店.
- 山口康雄(2005)『生涯スポーツとイベントの社会学』創文企画.